

転居がもたらす心理的・身体的弊害 に関する研究

中谷 颯太¹・川端 祐一郎²・藤井 聡³

¹学生会員 京都大学大学院 都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂4)
E-mail:nakatani.souta.84e@st.kyoto-u.ac.jp (Corresponding Author)

²正会員 京都大学准教 大学院工学研究科 (〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂4)
E-mail:kawabata.yuichiro.8x@kyoto-u.ac.jp

³正会員 京都大学教授 大学院工学研究科 (〒615-8540 京都府京都市西京区京都大学桂4)
E-mail:fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

我が国では人口の東京一極集中化が現在も継続中であるが、その一方で地方定住意識は高まっており、意に反した転居が増加している恐れがある。また、海外においては転居を頻繁に行うことに様々な弊害が存在するという研究も多数見られるが、日本において転居の弊害を定量的に分析した研究は行われていない。そこで本研究では、アンケート調査を通じて、転居と様々な心理的・身体的弊害の関連性を分析した。分析の結果、幼少期における引っ越しが後の幸福度を下げるという傾向を始め、頻繁に転居をすることの心理的・身体的な弊害が統計的に観察され、地域定住社会を推進することが合理的な政策方針であることが示唆された。

Key Words: residential mobility, centralization of population

1. 研究の背景と目的

(1) 研究の背景

我が国では、東京圏に人口が流入し続ける東京一極集中が問題となっている。このような傾向は、戦後の高度成長期以降に顕著に表れ始めた。1960年代、高度成長期には、工業化に伴って地方の農村や漁村地域から都市部への人口移動が進み、東京・名古屋・大阪圏への人口移動が増大した。1970年代以降は、3大都市圏への人口移動は収束を見せるものの、東京圏においては以前高い転入超過数を維持し、バブル崩壊後の一時期を除いて転入超過の状態が続いている(図-1)。また、こういった都市圏への人口集中の状況は、他のG7諸国と比べても甚大である^{注2)}。このように、国内で見ても、国際的に見ても日本における東京一極集中の現状が甚だしいことは明らかだと言える。

こうした東京一極集中には、集積の経済による利益のようなメリットが存在するという指摘も見られるものの、デメリットが多数見られる。一つには、集積の経済による不利益が集積によって得られる利益を上回っているとの指摘や²⁾、とりわけ大きなデメリットとして挙げられるのが、災害時のリスクの増大³⁾である。内閣府に

よると、首都直下型地震が起きた場合、その経済的被害は建物等の直接被害で約47兆円、その他の生産やサービス等の機能麻痺による経済被害も含めると総計で約97兆円にも上るとの想定が見られる^{注3)}。このように、東京一極集中にはある程度のメリットが認められるものの、それに伴って多くのデメリットが存在し、デメリットによるリスクの大きさを鑑みると東京一極集中は早急には是正すべき問題だと言える。

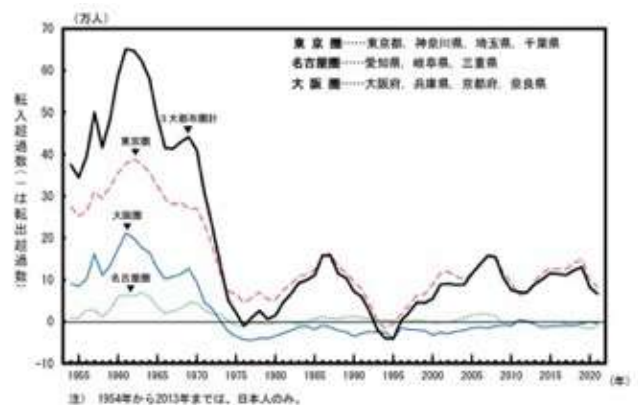


図-1 三大都市圏の転入超過数の推移 (1954年～2021年) 注1)

こうした東京一極集中による東京圏への転入超過が進む一方で、近年、若年世代における地方移住への関心や、地方定住に関する意識が高まっているという調査が多数見られる^{注4,注5,注6,注7}。労働政策研究・研修機構が行なった研究^{注4}によると、先行世代に比べて現行世代の若者は就職や進学に伴って、地元に着定する割合が高い傾向が見られるということが示されている。また、コロナ禍におけるテレワークの普及に伴う意識変化により地方移住意識が高まっているとの調査も見られる。NTTデータ経営研究所の調査^{注5}によると、都市圏居住者の3割弱が地方移住に関心があり、そのうち半数程度は移住に向けて準備を行なっているという。このように東京への転入超過が続く一方で、地方移住への関心や定住意識が高まっているという結果から、自らの意に反した東京への移動が増えている可能性が示唆される。

以上のような議論から、日本においては自らの意に反した引っ越しが増えている可能性が存在することが危惧される。なぜなら今日少なくとも若年層においては地方定住意識が拡大しているにも拘わらず現実には東京一極集中が進行し、定住でなく東京を中心とした都市部への移住を余儀なくされているケースが多数存在することが危惧されるからである。そしてそれと同時に、少なくとも海外においては引っ越しに様々な弊害を伴うリスクが指摘されており^{例えば4,5,6}、これが我が国においても妥当する可能性は十分に考えられる。これらを踏まえれば、東京一極集中の是正策として、引っ越しの少ない地方定住社会を推進するという方針は、合理的な政策方針である可能性があると考えられる。このような社会を実現することで、災害リスクを分散させた強靱な国土の実現に繋がると同時に、その地方に継続的に定住可能となる人々は、引っ越しから解放されることにより、引っ越しに伴う、とりわけ意に反した引っ越しに伴う様々な弊害からも解放されることが期待される。

ただし、日本において、このような引っ越しとその他の弊害に着目した研究は筆者の知る限り進められていない。また、文化や地域によって既往研究の結果が異なる可能性が示唆されている。Oishi⁷によると、日本はアメリカに比べて居住地流動性が低いことが指摘されており、このような地域的特性を考慮した上で引っ越しとその他の要因の関係を分析することが重要であると主張している。また、日本における転居願望と性格特性の間には海外の先行研究と一致した結果も見られる一方で、海外では一貫して表れていた傾向と異なる結果も見られたという⁸。従って、海外の研究結果をそのまま日本の政策決定に用いることには問題がある。

そこで、本研究では日本国内でアンケート調査を行い、引っ越しの頻度やその態様と、海外の研究で示されているものをはじめとする様々な弊害の関係に関する分析を

行い、日本においても引っ越しは弊害であると言い得るのか否か、どのような弊害が存在するのか等を検証する。このような分析を通じて、東京一極集中を是正し、引っ越しの少ない「地域定住社会」を推進していくことの重要性について実証的な知見を提供することが、本研究の目的である。また、現状のように社会的流動性が高まることについての無批判な肯定は危険であることについても示されることが期待される。

2. 既往研究と本研究の位置付け

本研究では、引っ越しの頻度やその態様と弊害の関係を検証することを目的としている。本章では、海外における転居と様々な弊害に関する既往研究、日本における転居に関する研究について概観する。その後に既往研究を踏まえ、本研究の有用性と位置づけを述べる。

(1) 海外における転居と様々な弊害に関する既往研究

転居に関連する研究の一種として、「居住地流動性」に関する研究が存在する。居住地流動性とは、個人が居住地を変える度合いであるが、個人のレベルでは、「ある期間に居住地を変えた回数」と定義され、州や国のレベルでは「ある期間に居住地を変えた住民の割合」とされる⁹。本研究で着目するのは、主に個人のレベルの居住地流動性が、当事者の心理等に与える影響である。このような居住地流動性に関する研究は我が国では例が少ないが、海外では盛んに行われており、居住地流動性をもたらす様々な弊害に関する研究も多く見られる。次項以降では、居住地流動性と様々な弊害に関する研究を概観する。

a) 転居と幸福感の関係に関する研究

まず重要だと考えられるのは、転居を頻繁に行うほど、幸福感が下がる傾向があると指摘する諸研究である。近年、幸福感は政策決定や土木という営為において無視できない指標の一つと指摘され¹⁰、政策を考える上で重要な指標となるが、幼少期に引っ越しを行うほど、成人後の幸福感が下がる傾向が過去の研究で示されている。

Oishi⁴は、頻繁な引っ越しと、幸福に関する指標の間には負の相関があることを主な仮説として実証的な検証を行った。この仮説をアメリカの7108人のパネルデータを分析したところ、仮説通り、引っ越しの回数と幸福感に関して負の相関があることが示された。また、これらの関係はBig Five性格特性において内向的な傾向の人ほど、また、神経症傾向の人ほど負の相関が大きいことが示された。加えて、その背景メカニズムを示唆する知見として、友人関係や家族関係、隣人関係を媒介とする調整媒介分析を行ったところ、内向的な人は親しい友人

関係や家族関係等の質の高い社会関係を築きにくいと、引っ越しと幸福感の間に負の相関が生じることも示されている。ここで Big Five 性格特性とはパーソナリティを Extraversion (外向性), Agreeableness (協調性), Conscientiousness (誠実性), Neuroticism (神経症傾向), Openness to Experience (開放性) の 5 つの大きな枠組みで捉えるもので、人間のパーソナリティに関する様々な尺度は概ねこの 5 次元の組み合わせで表現することが可能であるとされる¹¹⁾。

b) 転居と健康の関係に関する研究

転居を頻繁に行うほど、健康リスクが上昇し、健康に悪影響があるという傾向も多くの研究で示されている^{9) 12) 13)}。これらの傾向は、転居が精神的なストレスをかける行為であることを示唆している。以下では代表的な研究について概観する。

Dong¹⁴⁾は、アメリカにおいて、生後 18 年の経験について尋ねた Adverse Childhood Experiences (ACEs) というデータと引っ越しについての関連について分析した。分析の結果、幼少期の引っ越しの回数と、自殺未遂や喫煙、アルコール依存症、10 代での妊娠等 10 種類の健康リスクには正の相関があることが示された。

また、Li et al.¹⁵⁾は、大学生への調査を行い、引っ越しの回数と精神的健康に負の相関、引っ越しの回数と大学生の学業成績には負の相関があることを示している。引っ越しについては 6 歳未満、6-12 歳、12-18 歳の引っ越しと期間を分けた引っ越しについて尋ねており、6 歳未満と 12-18 歳の引っ越しが精神的健康と負の相関があり、6-12 歳の引っ越しが大学における学業不振と関連していた。

c) 転居とコミュニティへの意識に関する研究

Oishi et al.¹⁶⁾はアメリカにおいて、流動性の高い社会であるほど、コミュニティへの貢献度が下がる傾向にあることを実証している。アメリカのミネソタ州において住民は 30 ドルを支払うことで“critical habitat(絶滅危機生息地)”ナンバープレートを購入することができ、購入により得られた資金は当該の自然生息地を管理しているミネソタ州天然資源局に寄付される。よってこのナンバープレートを購入することで地域社会に利することができるのだが、流動性の高い地域ほどナンバープレートを購入しなくなる傾向にあることが示された。また、居住地流動性の高い社会であるほど継続的なコミュニティ支援と関係のある野球のホームゲーム観客動員数との関係の分析から、居住地流動性の高い社会の人ほど地元ของทีมやコミュニティ自体への帰属意識が低いことが示唆された。また、実験室の中で居住地流動性が高い社会と低い社会が再現され、参加者はそのどちらかに振り分けられ、4 つのタスクを行った結果を分析し、居住地流動性が低い社会ではコミュニティの成員への援助行動が多い傾向

にあることが示された。

また、転居をするほど、反社会的な傾向が強いことについても実証した研究がいくつか存在する^{15) 16)}。例えば Zuo et al.¹⁵⁾は、小サンプルの研究ではあるが、転居と反社会行動の関係について実証的に示している。中国人 194 名に居住地移動に関する質問を行い個人に関する居住地移動性を測定すると同時に、反社会行動を測定するテストを行ったところ、居住地移動性が高いことと、反社会行動に関して正の相関が示された。また、中国人 111 名に、居住地移動に関するいくつかの質問を行い定住生活、移動生活を想像させることによりマインドセットを移動群と定住群に分けた。その後、それぞれの群において反社会性を測定し、t 検定や共分散分析を行ったところ、居住地移動性が高い人ほど、反社会的傾向があることが示された。

引っ越しと自己概念（個人が持つ自己に関するイメージ）についての研究も存在する。Oishi et al.¹⁷⁾は、アメリカにおいて引っ越しと自己概念の関係について研究を行い、引っ越し回数が多い人ほど自己概念が個人中心的なものになり、引っ越し回数が少ない人ほど、自己概念は集団への帰属意識が高いものになることを示した。

以上のように、転居が多い人や社会であるほど、反コミュニティ行動につながる行動をとり、コミュニティとのつながりが希薄になることが示唆される。

(2) 日本における転居とその弊害の関係

前節では海外における転居とそれに伴う弊害に関する研究について概観したが、日本国内では、転居がもたらす「幸福」や「健康の低下のような直接的弊害の測定を目的とした研究は、筆者の知る限り行われていない。一方、文化的な違いや地域による違い（例えばアメリカのような国に比べれば我が国での転居は総じて距離が短いと考えられる）のため、海外で見られたような、頻繁に引っ越しする人ほど様々な不効用が見られる傾向が日本でも同様に見られるとは限らない。したがって、海外での実証研究の知見をそのまま国内に適用するわけにはいかず、我が国で実際に転居がどのような心理的・身体的影響を及ぼしているのかについては独自に研究する必要がある。

居住地流動性とパーソナリティの関連性については、少数ながら研究例は存在する。例えば、Yoshino, Oshio¹⁸⁾は、東京の学部生を対象に進学に伴って引っ越しを行ったか、定住していたかによって分類しそれぞれについて Big Five 性格特性の測定を行ったところ、海外の既往研究^{19) 20)}と一貫する結果として、引っ越しを頻繁に行っている人は外向性と開放性が高い傾向が見られた。しかしその一方で、海外の既往研究では示されていないような、引っ越しを頻繁に行っている人は高い誠実さと

低い神経症傾向を持つという結果も見られ、これらの背景には転居に関連する文化や国情の違いがある可能性が示唆されている。また、例えば海外と比較してそもそも日本は居住地流動性が低い傾向にある⁷⁾といった地域的特性の違いも十分考慮する必要があると考えられる。このような違いから生まれる差異の一例としては、Oishi⁹⁾は、居住地流動性が低い社会においては、暗黙の行動規範が存在しているため明示的なコミュニケーションが必要ないが、居住地流動性が高い社会では暗黙の行動規範の共有されておらず、明示的なコミュニケーションを必要とする、といった違いを挙げている。

(3) 本研究の位置付け

ここまで見てきた通り、海外において転居を行う数が多いほど、それに伴って様々な弊害が見られるという研究は多数存在する一方で、日本においてこのような関係を示した研究は筆者の知る限り進められていない。また、これらの海外の研究における引っ越しについての測定項目は、引っ越しとその年齢、また移動前後の居住地を聞くに留まるものが多く、それらの引っ越しが意に反するものなのかどうかや、その引っ越しの理由にまで踏み込んで分析しているものは少ない。

よって本研究では、海外で示されているようなものや、それらから導き出される引っ越しと心理的・身体的弊害についての仮説をアンケート調査によって検証する。このような関係を日本において示すことは、前述の海外との文化的・地域的差異を考慮すると十分に意義のあるものであると考えられる。また、引っ越しについて年齢と引っ越し前後の在住地に加え、引っ越しの理由や、その満足度まで尋ねたアンケート調査を実施する。これにより強制された、意に反した引っ越しなのかどうか等、既往研究には見られないより踏み込んだ分析が可能となる。加えて、一章で述べたように近年の社会的流動化が高まる社会の是非について、分析結果から示唆することが可能となる。

3. 研究方法

(1) 理論仮説

第1章で述べたように、本研究では、引っ越しの頻度やその態様と、海外の研究で示されているものをはじめとする様々な弊害の関係に関する分析を行い、日本においても引っ越しは弊害であると言い得るのか否か、どのような弊害が存在するのか等を検証する。また、その際に、海外の既往研究では行われていない引っ越しがどのような理由で行われたのか、またその引っ越しの満足度にも着目して分析を行う。

そのため、まず、海外の既往研究で示されている弊害が日本でも引っ越しとの関係があると言っているのかを分析するために以下の仮説1, 2を検証する。

仮説1 引っ越しをする回数が多いほど、幸福度は低下する

仮説2 引っ越しをする回数が多いほど、健康度は低下する

仮説1, 2については、既往研究^{4),5),6)}においては、主に幼少期の引っ越しが幸福度や健康度を低下させるといった仮説をもとに調査を行なっているが、本研究においては、幼少期に限らない様々な年齢における引っ越しについて分析を行うことが可能であり、また意に反した引っ越しや、不満の残る引っ越しといった理由や満足度別の引っ越しについても検討を行うものとする。

仮説3 引っ越しをする回数が多いほど、道徳性は低下する

三宅²¹⁾は、道徳的規範意識について「すべての生活活動に対し自己の思慮や節度、他者への思いやりや礼儀、社会との関わりに関する正義や規範などの意識」と定義している。

引っ越しをすればするほど、反社会性が上がる傾向にあること¹⁵⁾や、流動性が高い社会、とりわけ自分が生活しているコミュニティに対しての寄与が小さくなる¹⁴⁾ことから、仮説3のような引っ越しを多く行う人ほど、道徳性が低下するといった傾向にあることが推察される。

仮説4 引っ越しをする回数が多いほど、人への信頼感は低下する

引っ越しをすればするほど、反社会性が上がる傾向¹⁵⁾にあることや、自己概念が個人中心である¹⁷⁾こと、流動性が高い社会であるほど社会、とりわけ自分が生活しているコミュニティに対しての寄与が小さくなる¹⁴⁾ことから、仮説4を設定した。

(2) 調査実施概要

本研究では、3章1節で指定した仮説を検証するために、クロス・マーケティング社のインターネット調査サービスを使用したWebアンケート調査を実施した。インターネット調査サービスに加入しているモニターのうち、20代、30代、40代、50代、60代以上の男女各140名、1400名を抽出し、2023年1月13日~16日に調査を実施した。本調査で行ったアンケートの構成概要を以下に示す。

- F1～F8 個人属性
- Q1～Q3 引っ越し経験について
- Q4, Q5 主観的幸福感
- Q6 対人信頼感尺度, Dark Triad Dirty Dozen(日本語版)
- Q7 社会的関係尺度(家族, 友人), 隣人関係尺度
- Q8 TIPI-J, 健康度, 大衆性尺度

Q6 の 1～10 を全て同じ回答としているものについては, Q6 の 1～4 と 5～10 が逆転項目であるため, 不良サンプルとしてデータから除いている. 次節にて, 分析に用いる各尺度の質問項目, および設定理由について述べる.

(2) 調査項目

a) 個人属性

個人属性として, 性別, 年齢, 居住地(都道府県), 婚姻状況, 子どもの人数, 職業, 最終学歴, 年収の回答を収集した.

b) 引っ越し経験について

過去に行った引っ越し経験を尋ねた. まず引っ越し経験の有無について尋ね, 「引っ越しをした経験がある」と回答した人に, 引っ越しの回数を尋ねた. ここで回答した回数をもとに, 生まれてから順番に記憶の範囲で最大 7 回までの引越し経験について, 「引っ越しを行なった年齢」, 「引っ越し前の都道府県(海外の場合は海外を選択)」, 「引っ越し後の都道府県(海外の場合は海外を選択)」, 「引っ越しの理由」, 「その引っ越しについてしてよかったか」を尋ねた.

引っ越しの年齢については, 引っ越しをした年齢における影響の違いを分析するために収集した. また, 引っ越し前後の都道府県については, 日本の 47 都道府県, または「海外」という選択肢のいずれかを選択させる形式としている. 引っ越しの理由については, 表-1 のような選択肢とした. 引っ越しをしてよかったかについての選択肢は 5 件法(とてもよかった～とても悪かった)で尋ねた.

表-1 引っ越し理由

引っ越しの理由は?
1 親の都合(転勤など)
2 夫・妻の都合(転勤など)
3 その他の親族や他人の都合
4 自分の「進学」
5 自分の「就職・転勤」
6 自分の「結婚」
7 その他、自分の都合

c) 主観的幸福感

仮説 1 を検証するための幸福感を測定する指標として主観的幸福感を使用する. 主観的幸福感については, Diener²²⁾は「個人が自分の生活・人生のあらゆる側面に

対して下す主観的な評価」だとしている. また, この主観的幸福感には肯定的感情と否定的感情, 生活全体に関する認知的な満足感の 3 つで構成されているとされ, 肯定的感情と否定的感情を合わせたものを感情的幸福感, 生活全体に関する認知的な満足感に認知的幸福感と言われる^{22), 23)}.

感情的幸福感には「うれしい」, 「快い」などの感情に代表される幸福水準(valence)と「活発さ」や「積極性」といった幸福活性度(activation)の二つの尺度から構成されると言われており, この幸福水準—幸福活性尺度は Russel の円環モデルをもとに作成されている. 本研究では主観的幸福感を測定する尺度として, 上記の幸福水準—幸福活性尺度を測定する SCAS 尺度(Swedish Core Affect Scale)²⁴⁾を参考に北川ら²⁵⁾が作成した尺度を用いる. 具体的には, 以下の表-2 のような感情の水準と感情の活性度についてそれぞれ 3 つの形容詞のペアを質問項目として設けた.

表-2 感情的幸福感

感情的幸福感	
幸福水準(感情水準)	うれしい - 悲しい 幸せな - 不幸な 快い - 不快な
幸福活性度	積極的な - 消極的な 活発な - 退屈な ハッキリした感じ - 眠たい感じ

各水準, 活性度について 4 段階の水準を設定し, それぞれの項目について「全く感じない」, 「とても頻繁に感じる」を両端とする 5 件法による回答を要請した. また, 尺度の得点化には, 北川ら²⁵⁾を参考に以下のように各形容詞対について算出を行った.

計算例: 「悲しい—うれしい」尺度値
 $= -3 \times (\text{「とても悲しい気持ち」を感じた頻度})$
 $- 1 \times (\text{「少し悲しい気持ち」を感じた頻度})$
 $+ 1 \times (\text{「少しうれしい気持ち」を感じた頻度})$
 $+ 3 \times (\text{「とてもうれしい気持ち」を感じた頻度})$

その後, 幸福水準, 幸福活性度について加算平均をとり, 最後に幸福水準と幸福活性度の加算平均をとり, 感情的幸福感の尺度値とした.

また認知的幸福感の測定尺度として, 生活に対する満足度に関する 5 つの質問で構成される尺度である SWLS 尺度(Satisfaction With Life Scale)²⁶⁾を使用する. SWLS 尺度は幸福研究において最も頻繁に用いられる尺度の一つであり, 様々な国において測定, 比較が行われている²⁷⁾.

「1.全くあてはまらない」「5.とてもあてはまる」を両端とした 5 件法による回答を要請した. 各項目の回答値を合計し, SWLS の尺度値として用いる.

表-3 SMLS 尺度

SWLS 尺度	
1	ほとんどの面で私の人生は私の理想に近い
2	私の人生はとても素晴らしい
3	私は自分の人生に満足している
4	私はこれまで、自分の人生に求める大切なものを得てきた
5	もう一度人生をやり直せるとしてもほとんど何も変えないだろう

d) 健康度

仮説 2 を検証するための健康を測定する指標として、本研究では、徳永²⁹⁾が開発した健康度・生活習慣診断検査(DIHAL.2)の中で測定される尺度の一つである「健康度」を使用した。「健康度」は、松本ら^{29),30),31)}が WHO の健康の定義を参考に作成した 50 項目から成る「健康度診断検査」をより簡便に、また精選するべく開発されたものである。この尺度は、身体的健康、社会的健康、精神的健康の 3 つの下位尺度から成り、各 4 項目、合計 12 問の質問から構成される。質問内容については以下表 4 の通りである。「1.全くあてはまらない」「7.あてはまる」を両端とした 7 件法による回答を要請した。逆転項目について処理を行った後、合計得点を尺度値とした。

表-4 健康度

健康度	
身体的健康	毎日ぐっすり眠っている 食欲はある 勉強や仕事ができる体力はある
社会的健康	肥えすぎややせすぎはない 毎日の生活は充実している 教養・趣味的活動を行っている 自分の人生に希望や夢を持っている 地域(学校・職場内も含む)での、いろいろな行事参加、或いはクラブ・サークルに参加している
精神的健康	集団やグループにうまく適応していない(*) 対人関係で気まずい思いをしている(*) いつもイライラしている(*) 勉強(あるいは仕事)がはかどらず困っている(*)

*は逆転項目

e) 道徳性を測る尺度

仮説 3 を検証するためには、道徳性を測定する尺度が必要となる。道徳性をどのように定義し、定量化するかについては定説となる手法が存在しているわけではないが、本研究では、次のような考え方で「大衆性尺度³²⁾」

「Dark Triad Dirty Dozen 日本語版³³⁾」を使用する。各尺度の質問内容については表-5、表-6 を参照されたい。

〈大衆性尺度〉

「大衆性尺度³²⁾」は、「傲慢性」と「自己閉塞性」の二つの下位尺度からなる尺度である。羽鳥ら³²⁾は、『大衆の反逆(La Rebelion de las Masas)³⁴⁾』において、近代大衆社会における人間的生の否定や非道徳を含む価値が喪失されている中で心理的類型の一つとして捉えられた”大衆”という概念に着目し、『大衆の反逆』の邦訳から大

衆の特徴を説明する箇所から質問文を作成し、因子分析を繰り返すことで大衆性尺度を構成した。小松ら³⁵⁾は、このような大衆性が高い個人が弁証法的議論の進行を阻害することを実証的に検証している。前述した三宅²¹⁾の規範意識に対する定義を引用するならば、より良い社会を目指すための弁証法的議論の進行を阻害し、自己の制御能力に対して過大な評価を持ち他者への配慮に欠け(傲慢性)、社会との関わりや責務を忌避する傾向にある(自己閉塞性)、大衆性が高い個人は道徳性が低く、逆に大衆性が低い個人は道徳性が高い可能性があり、本研究では大衆性尺度を個人の道徳性を図る一指標として使用することに一定程度の妥当性があると判断した。本研究では各下位尺度それぞれについての加算平均を尺度値として使用する。

表-5 大衆性尺度

大衆性尺度	
傲慢性	自分を拘束するのは自分だけだと思う 自分の意見が誤っていることなどない、と思う 私は、どんな時でも勝ち続けるのではないかと、何となく思う 自分個人の“好み”が社会に反映されるべきだと思う どんな時も自分を信じて、他人の言葉などに耳を貸すべきではない、と思う “もの道理”には、あまり興味がない 物事の背景にあることには、あまり興味がない 日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う(*) 世の中の問題は、技術ですべて解決できると思う 人は人、自分は自分、だと思う 自分のことを、自分以外のものに委ねることは一切許されないとだと思う 道徳や倫理などというものから、自由に生きていきたいと思う
自己閉塞性	伝統的な事柄に対して敬意と配慮を持っている(*) 日々の日常生活は、感謝すべき対象で満たされている(*) 世の中は驚きに満ちていると感じる(*) 我々には、伝統を受け継ぎ、改良を加え、伝承していく義務があると思う(*) 自分自身への要求が多い方だ(*) もしも奉仕すべき対象がなくなれば、 生きている意味がなくなるのではないかと思う 自分は進んで義務や困難を負う方だ(*)

*は逆転項目

〈Dark Triad Dozen 日本語版 (DTDD-J)〉

「Dark Triad Dozen 日本語版³³⁾」は、マキャベリアニズム、サイコパシー傾向、自己愛傾向という 3 つの反社会的なパーソナリティ特性を指す Dark Triad(DT)を測定する尺度である。DT は様々な反社会的な問題行動との関連が指摘されており、対人関係における反社会性が示されている^{36),37)}。本尺度は Jonason & Webster が開発した 12 項目から構成される Dark Triad Dirty Dozen(DTDD)³⁸⁾の日本語版であり、先行研究との比較から一定程度の信頼性、妥当性が得られた尺度である。前述の三宅²¹⁾の道徳的規範意識に対する定義を引用するならば、反社会的なパーソナリティは社会との関わりに関する正義や規範などの意識に欠けたパーソナリティであると考えられるためこの尺度を使用する。尺度値としては、各尺度値の合計値を用いる。

表-6DTDD-J

Dark Triad Dirty Dozen 日本語版	
マキャベリアニズム	私にはほかの人をあやつってもじぶんの思い通りにするところがある 私には他の人をだましたり嘘をついてもじぶんの思い通りにするところがある 私には他の人にお世辞を言っても自分の思い通りにするところがある 私には自分の目的のためにほかの人を利用するところがある
サイコパシー傾向	私は、あまり自分のあやまちを認めることがない 私は、自分の行動の善悪にはあまり関心がない 私は、どちらかという冷淡で人の気持ちを気にしない 私は、どちらかという疑い深くひねくれた人間である
自己愛傾向	私は、他の人から立派な人物だと思われたいほうだ 私は、他の人から注目してほしいと思いがちだ 私は、高い身分や名声を手に入れたいと思いがちだ 私は、他の人からの特別な行為を期待しがちだ

表-7 対人信頼感尺度

対人信頼感尺度	
1	人は、基本的には正直である
2	人は、多少良くないことをやってもじぶんの利益を得ようとする(*)
3	人は、頼りにできる人がわずかしかない(*)
4	人は、ほかの人にの親切に下心を感じ、気をつけている(*)
5	人は、ふつう清く正しい人生を送る
6	人は、成功するためにうそをつく(*)
7	人は、近ごろだれも知らないところで多くの罪を犯している(*)
8	人は、ふつうほかの人と誠実にかかわっている
9	人は、だれかに利用されるかもしれないと思い、気をつけている(*)
10	人は、ほかの人を信用しないほうが安全であると思っている(*)
11	人は、ほかの人に対して、信用してもよいということがはっきりわかるまでは、用心深くしている(*)
12	人は、口先ではうまいことを言っても、結局は自分の幸せに一番関心がある(*)
13	人は、他の人を援助することは内心ではいやがっている(*)
14	人は、自分がするといったことは実行する
15	人は、チャンスがあれば税金をごまかす(*)
16	人は、他人の権利を認めるよりも、自分の権利を主張する(*)
17	人は、やっかいなめにあわないために、うそをつく(*)

*は逆転項目

表-8 家族関係、友人関係

社会関係の質尺度(家族関係, 友人関係)	
サポート尺度	家族(友人)はどれぐらい、あなたの考えていることを理解してくれていますか? 家族(友人)はどれぐらい、あなたのことを気にかけてくれていますか? 何か深刻な問題があつて助けを求めたい場合、家族(友人)のことをどれくらい頼りにしますか? 何か心配ごとがある場合、家族(友人)にどれだけ打ち明けることができますか?
緊張尺度	家族(友人)があなたを非難することは、どれぐらいありますか? 家族(友人)があなたに過剰な要求をすることは、どれぐらいありますか? 家族(友人)があなたの頼んだことをやってくれないことは、どれぐらいありますか? 家族(友人)があなたをいらつかせることは、どれぐらいありますか?

f) 人への信頼性を測る尺度

仮説4を検証するために、対人信頼感尺度を用いる。対人信頼感尺度は堀井・植谷^{39), 40)}によって開発された尺度であり、Rotter⁴⁰⁾が作成した対人信頼感尺度を元に作成された、17項目から成る人間一般への信頼感を測定する尺度である(表-7)。関連する尺度^{41), 42)}との相関も認められ、一定水準の妥当性、信頼性が得られている。尺度値として各尺度の平均値を使用する。

g) 社会的関係の質を測る尺度

社会的関係の質を測定する尺度として、Oishi⁴⁾が用いている友人関係、家族関係、隣人関係尺度を用いる。友人関係、家族関係についてはSchuster, Kessler, and Aseltine⁴³⁾, Whalen and Lachman⁴⁴⁾が開発した尺度であり、質問内容は表-8である。尺度値として、サポート尺度の合

計値から緊張尺度の合計値を引いたものをそれぞれ使用する。隣人関係尺度として、Keyes⁴⁵⁾が開発した隣人関係尺度を使用する。4項目の質問から成るが、Oishi⁴⁾に倣ってそのうちの2問を使用した。尺度値としては2項目の平均を使用する。本研究において家族関係尺度は、重回帰分析の際の統制変数として、友人関係、隣人関係尺度については、媒介分析の際の媒介変数として用いる。

表9 隣人関係

社会関係の質尺度(隣人関係)	
必要な時に近所の人に助けを求めることができますか?	
近所の人たちはお互いに信頼しあっていますか?	

h) Big Five パーソナリティを測る尺度

Big Five パーソナリティを測定する尺度として、日本

語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)¹¹⁾を使用する。Big Five 性格特性とはパーソナリティを Extraversion (外向性), Agreeableness (協調性), Conscientiousness (誠実性), Neuroticism (神経症傾向), Openness to Experience (開放性) の5つの大きな枠組みで捉えるものであり、人間のパーソナリティに関する様々な尺度は概ねこの5次元の組み合わせで表現することが可能であるとされる¹¹⁾。本尺度は、Big Five パーソナリティの各次元を正方向と負方向の2問の質問で測定する尺度である、Gosling et al.⁴⁰⁾が開発した Ten Item Personality Inventory(TIPI)をもとに小塩ら¹¹⁾が開発した日本語版 TIPI である。既存の Big Five 尺度^(例えば、47)、48)との比較検討から、一定程度の信頼性と妥当性が認められており、転居とパーソナリティに関する研究^{8)、18)}においても使用されている。本研究において本尺度は、重回帰分析の際の統制変数として主に使用する。

表-10 TIPI-J

日本語版 Ten Item Personality Inventory	
外向性	私は、活発で、外向的だと思う 私は、ひかえめで、おとなしいと思う(*)
誠実性	私は、しっかりしていて、自分に厳しいと思う 私は、だらしなく、うっかりしていると思う(*)
開放性	私は、新しいことが好きで、変わった考えをもつと思う 私は、発想力に欠けた、平凡な人間だと思う(*)
協調性	私は、人に気をつかう、やさしい人間だと思う 私は、他人に不満をもち、もめごとを起こしやすいと思う(*)
神経症傾向	私は、心配性で、うろたえやすいと思う 私は、冷静で、気分が安定していると思う(*)

*は逆転項目

4. 分析結果

(1) 基本統計

a) 各尺度の信頼性分析

本項では、本研究で使用した各種尺度についての信頼性分析を行う。TIPI-J 以外のものについてはクロンバックの α 係数を算出した。結果については表-12を参照されたい。TIPI-Jについては既往研究^{8)、18)}に合わせ、各下位尺度それぞれ対応する二項目について逆転項目処理後の相関係数を算出し、信頼性の分析を行った(表-11)。クロンバックの α については、大衆性尺度の自己閉塞性以外、 $\alpha > .70$ と一定程度の信頼性が認められた。また、大衆性尺度の自己閉塞性については.64であるが、既往研究³²⁾と比較しても同程度の水準の信頼性であり、一定程度の信頼性が認められたと考えら、尺度として使用することとした。

TIPI-Jの相関係数については、外向性 $r=.27(p<.001)$ 、誠実性 $r=.35(p<.001)$ 、開放性 $r=.26(p<.001)$ 、神経症傾向 $r=.25(p<.001)$ 、協調性 $r=.23(p<.001)$ であった。相関係数が大きいわけではないが、本尺度は、Big Fiveの各因子の意味の広がり測定するためには、あまり大きい相関係数を示さない方が望ましい¹¹⁾とされ、既往研究^{8)、18)}とも同程度の水準であることから、一定程度の信頼性を認め、尺度として用いることとした。

表-11 TIPI-J 信頼性分析

尺度名	平均	標準偏差	相関係数	p値
TIPI-J(外向性)	3.45	1.19	0.27	$p<.001$ **
TIPI-J(誠実性)	3.82	1.24	0.35	$p<.001$ **
TIPI-J(開放性)	3.53	1.15	0.26	$p<.001$ **
TIPI-J(神経症)	4.18	1.17	0.25	$p<.001$ **
TIPI-J(協調性)	4.53	1.08	0.23	$p<.001$ **

(逆転項目処理後) †: $p<.01$ *: $p<.05$ **: $p<.01$

表-12 各尺度基本統計

No.	尺度名	平均	標準偏差	α
1	感情的幸福感(幸福水準, 3項目)	1.69	6.34	0.94
2	感情的幸福感(幸福活性度, 3項目)	-0.71	5.07	0.82
3	認知的幸福感(6項目)	13.64	4.80	0.91
4	対人信頼感(17項目)	3.83	0.83	0.90
5	家族関係尺度(家族サポート, 4項目)	11.60	2.94	0.90
6	家族関係尺度(家族緊張, 4項目)	9.21	2.58	0.80
7	友人関係尺度(友人サポート, 4項目)	9.95	2.92	0.90
8	友人関係尺度(友人緊張, 4項目)	7.84	2.67	0.88
9	隣人関係尺度(2項目)	2.03	0.80	0.87
10	健康度(身体的健康, 4項目)	17.94	4.36	0.70
11	健康度(精神的健康, 4項目)	17.78	4.62	0.78
12	健康度(社会的健康, 4項目)	14.46	4.92	0.79
13	日本語版Dark Triad Dirty Dozen(マキャベリアニズム, 4項目)	12.59	4.48	0.85
14	日本語版Dark Triad Dirty Dozen(サイコパシー傾向, 4項目)	13.93	4.19	0.74
15	日本語版Dark Triad Dirty Dozen(自己愛傾向, 4項目)	12.58	4.59	0.83
16	大衆性尺度(傲慢性, 12項目)	3.45	0.67	0.76
17	大衆性尺度(自己閉塞性, 7項目)	3.90	0.72	0.64

N=1400

(1, 2, 3は5件法, 5, 6, 7, 8は4件法, その他は7件法)

表 -13 各引っ越し回数の基本統計

No.	各引っ越しの分類	平均	標準偏差	中央値	最小値	最大値
1	引っ越し	3.38	3.13	3	0	32
2	5歳以上12歳以下の引越し	0.31	0.70	0	0	5
3	満足度が低い引越し	0.21	0.60	0	0	6
4	強制された引越し	0.92	1.45	0	0	7

N=1400

表 -14 各引っ越し経験回数別人数

No.	各引っ越しの分類	0回	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回以上	計
1	引っ越し	186	211	261	223	119	171	56	40	133	1400
2	5歳以上12歳以下の引越し	1113	181	76	21	8	1	0	0		1400
3	満足度が低い引越し	1188	155	37	14	2	3	1	0		1400
4	強制された引越し	827	247	134	94	44	28	14	12		1400

表 -15 相関分析結果

尺度名	引っ越し回数	5歳以上12歳以下引越し回数	強制された引越し	満足度の低い引越し
感情的幸福感	0.07 *		-0.05 *	0.05 †
認知的幸福感	0.05 †		-0.05 †	0.03
健康度	0.05 †		-0.03	0.05 †
大衆性尺度(傲慢性)	-0.02		-0.04	0.00
大衆性尺度(自己閉塞性)	-0.05 *		0.03	-0.02
Dark Triad Dirty Dozen日本語版	-0.02		0.01	-0.03
対人信頼感	0.01		-0.01	0.01
TIPI-J(外向性)	0.07 **		-0.03	0.04 †
TIPI-J(誠実性)	0.07 *		-0.05 †	0.00
TIPI-J(開放性)	0.05 †		-0.01	0.00
TIPI-J(神経症傾向)	-0.05 †		0.01	-0.02
TIPI-J(協調性)	0.05 †		-0.01	0.04

N=1400

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

b) 各種転居の基本統計

分析するにあたり、引っ越し回数や引っ越しの有無を説明変数とするため、各引っ越し回数の集計を行った(表-13,表-14)。本研究では「引っ越し」、「5歳以上12歳以下の引越し」、「強制された引越し」、「満足度が低い引越し」の4つの引っ越しについて分析を行った。ここで、「強制された引越し」とは、引っ越しの理由について(表-1)の「1.親の都合(転勤など)」、「2.夫・妻の都合(転勤など)」、「3.その他の親族や他人の都合」を選択した引っ越しについて集計を行った。また、「満足度が低い引越し」については、引っ越しをしてよかったかの質問に対して、「とても悪かった」、「やや悪かった」と回答した引っ越しについて集計を行った。

(2) 各種転居回数と各種尺度の相関分析

本節では、前節で述べた各種の引越し回数と各種尺度との単相関の分析を行った結果を報告する。相関分析の結果を表-15に示す。全体的に相関が小さい点については留意が必要であるが、以下で相関の正負及び無相関検定の結果とその解釈について述べる。

引っ越しと各種尺度との相関に着目すると、引っ越しと感情的幸福感については5%水準で有意に正の相関、また認知的幸福感については10%水準で有意傾向ではあるが正の相関が見られた。健康度についても10%水準有意傾向で正の相関、大衆性尺度については自己閉

塞性のみ有意に負の傾向が見られ、DTDD、対人信頼感について、相関は見られなかった。単なる引っ越しにおいては、全体的に仮説と逆の傾向が見られ、仮説は支持されなかったと言える。

5歳以上12歳以下の引っ越しについては、感情的幸福感について有意に負の相関が、認知的幸福感においては有意傾向ではあるが負の相関が見られ、既往研究⁴⁾と同様に仮説1を支持する結果となった。その他の尺度について有意なものは見られず無相関であった。

強制された引っ越しについては感情的幸福感、健康度においてそれぞれ10%水準有意傾向で正の相関が見られた。仮説1,2については逆の傾向、仮説3,4については支持されない結果となった。

また、満足度の低い引っ越しにおいては、感情的幸福感、認知的幸福感、健康度、対人信頼感において有意に負の相関、大衆性尺度の自己閉塞性において有意に正の相関が見られ、仮説1,2,4について仮説が支持され、仮説3についても部分的に支持される結果となった。

以上から、相関分析においては、5歳以上12歳以下の引っ越しにおいて仮説1が、満足度の低い引っ越しにおいて、仮説1-4が支持され、5歳以上12歳以下の引っ越しを繰り返す人ほど幸福度が低くなり、満足度の低い引っ越しを繰り返す人ほど、幸福度や健康度、道徳性や人への信頼感が低くなる可能性が示唆された。

(3) 各種転居回数と各種尺度の重回帰分析

前節では、4つの観点から分類した引っ越しの回数と仮説に関連する各尺度について単相関を分析したが、有意ではあるが係数が全体に小さかった。そこで、本節では各種の引っ越しが、種々の個人属性の影響を取り除いた上で、各尺度にどのような影響を与えるのかを詳しく検討するため、個人属性を統制変数に加えた、重回帰分析を行った。統制変数には、引っ越しの影響を受けない固有の個人属性と思われる、年齢、性別、家族関係、外向性、誠実性、開放性、神経症傾向、協調性を加えた。性別は、男性を0、女性を1としたダミー変数である。また、家族関係、外向性、誠実性、開放性、神経症傾向、協調性については尺度得点をそれぞれ使用した。以下に主だった結果についての表と解釈を記述する(他の結果については付録参照)。

まず、前節の単相関分析で仮説と逆の傾向を示したものについて、すなわち説明変数を単なる引っ越しとし、従属変数を感情的幸福感、認知的幸福感、健康度、自己閉塞性とした重回帰分析、また説明変数を強制的な引っ越し、従属変数を感情的幸福感、健康度とした重回帰分析をそれぞれ行った結果を報告する(表-16-表-21)。重回帰分析の結果、各引っ越しにおける従属変数への影響はいずれも有意ではなくなり、適切に統制を行うことで仮説と逆の傾向は見られなくなった。

表-16 単なる引っ越しと感情的幸福感の重回帰分析

従属変数：感情的幸福感 (N=1400)		R ² =0.45, 調整済R ² =0.45		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
引っ越し回数	0.01	0.02	0.54	0.59
性別	0.03	0.02	1.42	0.16
年齢	0.07	0.02	3.14	0.00 **
家族関係	0.33	0.02	15.45	0.00 **
外向性	0.21	0.02	9.46	0.00 **
誠実性	0.08	0.02	3.14	0.00 **
開放性	0.05	0.02	2.29	0.02 *
協調性	0.12	0.02	5.14	0.00 **
神経症傾向	-0.23	0.03	-8.94	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-17 単なる引っ越しと認知的幸福感の重回帰分析

従属変数：認知的幸福感 (N=1400)		R ² =0.28, 調整済R ² =0.28		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
引っ越し回数	0.02	0.02	0.76	0.45
性別	0.06	0.02	2.72	0.01 *
年齢	0.03	0.02	1.40	0.16
家族関係	0.31	0.02	12.40	0.00 **
外向性	0.17	0.03	6.62	0.00 **
誠実性	0.08	0.03	2.65	0.01 **
開放性	0.06	0.03	2.20	0.03 *
協調性	0.05	0.03	1.73	0.08 †
神経症傾向	-0.15	0.03	-5.25	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-18 単なる引っ越しと健康度の重回帰分析

従属変数：健康度 (N=1400)		R ² =0.50, 調整済R ² =0.50		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
引っ越し回数	0.00	0.02	0.01	0.99
性別	0.04	0.02	2.20	0.03 *
年齢	0.04	0.02	1.84	0.07 †
家族関係	0.30	0.02	14.52	0.00 **
外向性	0.14	0.02	6.75	0.00 **
誠実性	0.07	0.02	3.02	0.00 **
開放性	0.06	0.02	2.48	0.01 *
協調性	0.26	0.02	11.48	0.00 **
神経症傾向	-0.25	0.02	-10.30	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-19 単なる引っ越しと自己閉塞性の重回帰分析

従属変数：大衆性(自己閉塞性) (N=1400)		R ² =0.20, 調整済R ² =0.20		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
引っ越し回数	-0.02	0.03	-0.79	0.43
性別	-0.09	0.02	-3.72	0.00 **
年齢	-0.04	0.03	-1.70	0.09 †
家族関係	-0.18	0.03	-7.11	0.00 **
外向性	-0.03	0.03	-0.95	0.34
誠実性	-0.08	0.03	-2.55	0.01 *
開放性	-0.18	0.03	-6.20	0.00 **
協調性	-0.22	0.03	-7.82	0.00 **
神経症傾向	-0.04	0.03	-1.34	0.18

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-20 強制的な引っ越しと感情的幸福感の重回帰分析

従属変数：感情的幸福感 (N=1400)		R ² =0.45, 調整済R ² =0.45		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
強制的な引っ越し	0.01	0.02	0.72	0.47
性別	0.03	0.02	1.30	0.19
年齢	0.07	0.02	3.25	0.00 **
家族関係	0.33	0.02	15.45	0.00 **
外向性	0.21	0.02	9.47	0.00 **
誠実性	0.08	0.02	3.17	0.00 **
開放性	0.05	0.02	2.30	0.02 *
協調性	0.12	0.02	5.14	0.00 **
神経症傾向	-0.23	0.03	-8.92	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-21 強制的な引っ越しと健康度の重回帰分析

従属変数：健康度 (N=1400)		R ² =0.50, 調整済R ² =0.50		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
強制的な引っ越し	0.02	0.02	0.95	0.34
性別	0.04	0.02	2.05	0.04 *
年齢	0.03	0.02	1.74	0.08 †
家族関係	0.30	0.02	14.53	0.00 **
外向性	0.14	0.02	6.73	0.00 **
誠実性	0.07	0.02	3.07	0.00 **
開放性	0.06	0.02	2.48	0.01 *
協調性	0.26	0.02	11.46	0.00 **
神経症傾向	-0.25	0.02	-10.30	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

次に、5歳以上12歳以下の引っ越しと幸福感についての重回帰分析を行った(表-22, 表-23)。認知的幸福感に対する影響は有意ではなくなったが、感情的幸福感に

対しては負の有意傾向で、小さい係数ではあるが負の傾向が認められ、仮説1が部分的に支持されたと言える。つまり、5歳以上12歳以下の引っ越しを繰り返す人ほど、幸福感が下がる可能性があることが示唆された。

表-22 5-12歳の引っ越しと感情的幸福感の重回帰分析

従属変数：感情的幸福感 (N=1400)		R ² =0.45, 調整済R ² =0.44		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
5歳以上12歳以下引っ越し	-0.03	0.02	-1.75	0.08 †
性別	0.03	0.02	1.43	0.15
年齢	0.07	0.02	3.39	0.00 **
家族関係	0.33	0.02	15.43	0.00 **
外向性	0.21	0.02	9.48	0.00 **
誠実性	0.08	0.02	3.05	0.00 **
開放性	0.05	0.02	2.31	0.02 *
協調性	0.12	0.02	5.18	0.00 **
神経症傾向	-0.23	0.03	-8.97	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-23 5-12歳の引っ越しと認知的幸福感の重回帰分析

従属変数：認知的幸福感 (N=1400)		R ² =0.28, 調整済R ² =0.28		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
5歳以上12歳以下引っ越し	-0.03	0.02	-1.44	0.15
性別	0.06	0.02	2.73	0.01 **
年齢	0.04	0.02	1.64	0.10
家族関係	0.30	0.02	12.38	0.00 **
外向性	0.17	0.03	6.64	0.00 **
誠実性	0.07	0.03	2.56	0.01 *
開放性	0.06	0.03	2.22	0.03 *
協調性	0.05	0.03	1.78	0.08 †
神経症傾向	-0.15	0.03	-5.27	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

最後に、満足度の低い引っ越しが種々の従属変数に与える影響に関する重回帰分析の結果を報告する。まず、満足度の低い引っ越しと幸福感においては、個人属性で統制してもどちらの幸福感の尺度も負で有意となり、仮説1を支持する結果となった(表-24, 表-25)。よって不満の残る引っ越しを行うほど、幸福感が下がる可能性があることが示唆された。満足度の低い引っ越しと健康度の重回帰分析においても、個人属性で統制しても引っ越し係数は負で有意となった(表-26)。よって、仮説2を支持する結果だと言うことができ、満足度の低い引っ越しを繰り返す人ほど、健康度が下がる可能性が示唆された。満足度の低い引っ越しと大衆性(自己閉塞性)については、個人属性で統制した結果、正の係数は有意ではなくなり、仮説3は支持されなかった(表-27)。満足度の低い引っ越しと対人信頼感においては、個人属性で統制しても引っ越し係数は負で有意となり、仮説4が支持される結果となり、満足度の低い引っ越しを行う人ほど、人に対する信頼感が低下する可能性が示唆された(表-28)。

表-24 満足度の低い引っ越しと感情的幸福感の重回帰分析

従属変数：感情的幸福感 (N=1400)		R ² =0.46, 調整済R ² =0.45		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
満足度の低い引っ越し	-0.09	0.02	-4.70	0.00 **
性別	0.03	0.02	1.49	0.14
年齢	0.08	0.02	3.68	0.00 **
家族関係	0.32	0.02	15.02	0.00 **
外向性	0.22	0.02	9.76	0.00 **
誠実性	0.08	0.02	3.03	0.00 **
開放性	0.06	0.02	2.34	0.02 *
協調性	0.12	0.02	5.24	0.00 **
神経症傾向	-0.22	0.03	-8.68	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-25 満足度の低い引っ越しと認知的幸福感の重回帰分析

従属変数：認知的幸福感 (N=1400)		R ² =0.30, 調整済R ² =0.29		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
満足度の低い引っ越し	-0.12	0.02	-5.15	0.00 **
性別	0.06	0.02	2.81	0.01
年齢	0.05	0.02	1.94	0.05 †
家族関係	0.29	0.02	11.94	0.00 **
外向性	0.18	0.03	6.93	0.00 **
誠実性	0.07	0.03	2.52	0.01 **
開放性	0.06	0.03	2.26	0.02 *
協調性	0.05	0.03	1.82	0.07 †
神経症傾向	-0.14	0.03	-4.95	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-26 満足度の低い引っ越しと健康度の重回帰分析

従属変数：健康度 (N=1400)		R ² =0.51, 調整済R ² =0.50		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
満足度の低い引っ越し	-0.05	0.02	-2.85	0.00 **
性別	0.04	0.02	2.25	0.02 *
年齢	0.04	0.02	2.06	0.04 *
家族関係	0.29	0.02	14.20	0.00 **
外向性	0.15	0.02	6.89	0.00 **
誠実性	0.07	0.02	2.95	0.00 **
開放性	0.06	0.02	2.50	0.01 *
協調性	0.26	0.02	11.55	0.00 **
神経症傾向	-0.24	0.02	-10.13	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-27 満足度の低い引っ越しと自己閉塞性の重回帰分析

従属変数：自己閉塞性 (N=1400)		R ² =0.20, 調整済R ² =0.19		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
満足度の低い引っ越し	0.02	0.02	0.98	0.33
性別	-0.09	0.02	-3.72	0.00 **
年齢	-0.05	0.03	-2.03	0.04 *
家族関係	-0.18	0.03	-6.98	0.00 **
外向性	-0.03	0.03	-1.02	0.31
誠実性	-0.08	0.03	-2.51	0.01 *
開放性	-0.18	0.03	-6.23	0.00 **
協調性	-0.23	0.03	-7.86	0.00 **
神経症傾向	-0.04	0.03	-1.41	0.16

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-28 満足度の低い引越しと対人信頼感の重回帰分析

従属変数：対人信頼感 (N=1400)		R ² =0.15, 調整済R ² =0.14		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
満足度の低い引越し	-0.10	0.03	-3.81	0.00 **
性別	0.08	0.03	3.00	0.00 **
年齢	0.00	0.03	0.02	0.99
家族関係	0.11	0.03	4.25	0.00 **
外向性	0.18	0.03	6.48	0.00 **
誠実性	0.08	0.03	2.67	0.01 **
開放性	-0.06	0.03	-2.01	0.04 *
協調性	0.05	0.03	1.72	0.09 †
神経症傾向	-0.14	0.03	-4.48	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

以上の分析より、海外で見られていた「幼少期における引越しが健康度に影響を与える傾向」は本研究において見られなかったが、5歳以上12歳以下で引越しを行うほど「幸福感」が下がる傾向があることが分かり、既往研究⁴⁾と同様の傾向が確認されたと言える。また、満足度の低い引越しを行う人ほど、幸福感、健康度、人への信頼感が下がる可能性が示唆された。

「引越しをすれば道德性が下がる」という傾向は重回帰分析においてはどの観点の引越しからも確認されず、仮説3は支持されない結果となった。

(4) 社会的な関係の良好さを媒介変数とした媒介分析

既往研究において、引越し回数が幸福度等に影響を与えるメカニズムとして、友人関係や隣人関係等の社会的関係の質（良好さ）の高低による媒介効果の存在が示唆されている⁴⁾。そこで本節では、相関分析において仮説通りの傾向が見られた「5歳以上12歳以下の引越し」及び「満足度の低い引越し」と各仮説に関連する尺度について、友人関係と隣人関係の二つの媒介変数を考慮した媒介分析を行った。

まず、5~12歳以下の引越しと幸福感についての媒介分析を見ると、どちらも直接効果は有意ではなく、引越し回数が隣人関係を媒介として幸福感を低下させる有意な効果を持つことが示された（表-29, 表-30, 図-2, 図-3）。なお適合度指標については有意でないパスを除いたものにおいて、感情的幸福感はRMSEAが0.025, CFIが0.994, 認知的幸福感はRMSEAが0.011, CFIが0.999となり良好であると言える。

表-29

従属変数：感情的幸福感 (N=1400)				
パス	係数	標準誤差	Z値	p値
5歳~12歳引越し→隣人関係	-0.07	0.03	-2.16	0.03 *
5歳~12歳引越し→友人関係	-0.07	0.15	-0.44	0.66
5歳~12歳引越し→感情的幸福感	-0.25	0.17	-1.43	0.15
隣人関係→感情的幸福感	1.77	0.17	10.48	0.00 **
友人関係→感情的幸福感	0.50	0.04	12.56	0.00 **
媒介効果(引越し→隣人→感情的幸福感)	-0.12	0.06	-2.08	0.04 *
媒介効果(引越し→友人→感情的幸福感)	-0.03	0.08	-0.44	0.66
全体効果	-0.41	0.19	-2.13	0.03 *

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-30

従属変数：認知的幸福感 (N=1400)				
パス	係数	標準誤差	Z値	p値
5歳~12歳引越し→隣人関係	-0.07	0.03	-2.13	0.03 *
5歳~12歳引越し→友人関係	-0.07	0.15	-0.44	0.66
5歳~12歳引越し→認知的幸福感	-0.17	0.16	-1.10	0.27
隣人関係→認知的幸福感	1.90	0.16	12.03	0.00 **
友人関係→認知的幸福感	0.37	0.03	11.41	0.00 **
媒介効果(引越し→隣人→認知的幸福感)	-0.13	0.06	-2.10	0.04 *
媒介効果(引越し→友人→認知的幸福感)	-0.03	0.06	-0.44	0.66
全体効果	-0.33	0.20	-1.67	0.10 †

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

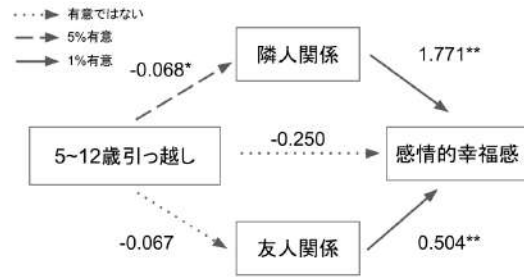


図-2

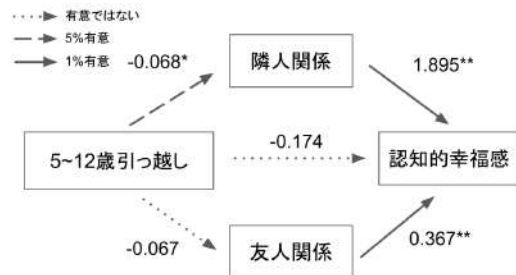


図-3

次に、満足度が低い引越しを説明変数、各種の尺度を従属変数とし、隣人関係、友人関係を媒介変数とした媒介分析を行った（表-31~表-35, 図-4~図-8）。適合度指標については有意でないパスを除いたものにおいて、感情的幸福感はRMSEAが0.120, CFIが0.949, 認知的幸福感はRMSEAが0.120, CFIが0.946, 健康度はRMSEAが0.120, CFIが0.951, 大衆性尺度はRMSEAが0.084, CFIが0.898, 対人信頼感は、RMSEAが0.120, CFIが0.928となり比較的良好であった。結果から満足度の低い引越し回数が友人関係、隣人関係を媒介として感情的幸福感、認知的幸福感、健康度、対人信頼感を低下させ、大衆性（自己閉塞性）を上昇させる有意な効果を持っていることが示された。媒介効果に加えて、感情的幸福感、認知的幸福感、健康度、対人信頼感においては直接効果も有意水準以下であり、強くこれらの弊害を誘発している様子が示された。

表-31

従属変数：感情的幸福感 (N=1400)

パス	係数	標準誤差	Z値	p値
満足度が低い引越し→隣人関係	-0.18	0.04	-4.84	0.00 **
満足度が低い引越し→友人関係	-0.50	0.16	-3.16	0.00 **
満足度が低い引越し→感情的幸福感	-0.83	0.25	-3.29	0.00 **
隣人関係→感情的幸福感	1.71	0.17	9.88	0.00 **
友人関係→感情的幸福感	0.49	0.04	12.53	0.00 **
媒介効果(引越し→隣人→感情的幸福感)	-0.30	0.07	-4.29	0.00 **
媒介効果(引越し→友人→感情的幸福感)	-0.25	0.08	-3.13	0.00 **
全体効果	-1.38	0.26	-5.38	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-32

従属変数：認知的幸福感 (N=1400)

パス	係数	標準誤差	Z値	p値
満足度が低い引越し→隣人関係	-0.18	0.04	-4.99	0.00 **
満足度が低い引越し→友人関係	-0.50	0.15	-3.29	0.00 **
満足度が低い引越し→認知的幸福感	-0.83	0.19	-4.43	0.00 **
隣人関係→認知的幸福感	1.83	0.15	12.01	0.00 **
友人関係→認知的幸福感	0.36	0.03	11.46	0.00 **
媒介効果(引越し→隣人→認知的幸福感)	-0.33	0.07	-4.76	0.00 **
媒介効果(引越し→友人→認知的幸福感)	-0.18	0.06	-3.22	0.00 **
全体効果	-1.33	0.21	-6.51	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-33

従属変数：健康度 (N=1400)

パス	係数	標準誤差	Z値	p値
満足度が低い引越し→隣人関係	-0.18	0.04	-5.07	0.00 **
満足度が低い引越し→友人関係	-0.50	0.15	-3.30	0.00 **
満足度が低い引越し→健康度	-1.10	0.50	-2.18	0.03 *
隣人関係→健康度	2.98	0.35	8.58	0.00 **
友人関係→健康度	1.09	0.08	13.60	0.00 **
媒介効果(引越し→隣人→健康度)	-0.53	0.12	-4.28	0.00 **
媒介効果(引越し→友人→健康度)	-0.55	0.17	-3.19	0.00 **
全体効果	-2.17	0.50	-4.38	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-34

従属変数：大衆性尺度(自己閉塞性) (N=1400)

パス	係数	標準誤差	Z値	p値
満足度が低い引越し→隣人関係	-0.18	0.04	-4.96	0.00 **
満足度が低い引越し→友人関係	-0.50	0.15	-3.26	0.00 **
満足度が低い引越し→自己閉塞性	0.03	0.04	0.64	0.52
隣人関係→自己閉塞性	-0.09	0.03	-3.52	0.00 **
友人関係→自己閉塞性	-0.06	0.01	-9.19	0.00 **
媒介効果(引越し→隣人→自己閉塞性)	0.02	0.01	2.69	0.01 **
媒介効果(引越し→友人→自己閉塞性)	0.03	0.01	3.22	0.00 **
全体効果	0.07	0.04	1.87	0.06 †

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

表-35

従属変数：対人信頼感 (N=1400)

パス	係数	標準誤差	Z値	p値
満足度が低い引越し→隣人関係	-0.18	0.04	-5.02	0.00 **
満足度が低い引越し→友人関係	-0.50	0.15	-3.29	0.00 **
満足度が低い引越し→対人信頼感	-0.09	0.04	-2.72	0.01 **
隣人関係→対人信頼感	0.29	0.03	10.57	0.00 **
友人関係→対人信頼感	0.05	0.01	6.70	0.00 **
媒介効果(引越し→隣人→対人信頼感)	-0.05	0.01	-4.37	0.00 **
媒介効果(引越し→友人→対人信頼感)	-0.02	0.01	-2.80	0.01 **
全体効果	-0.17	0.04	-4.29	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

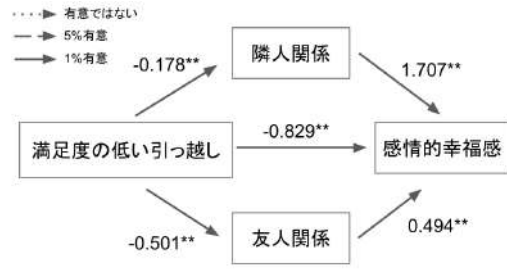


図-4

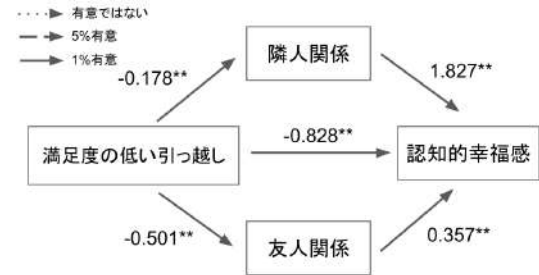


図-5

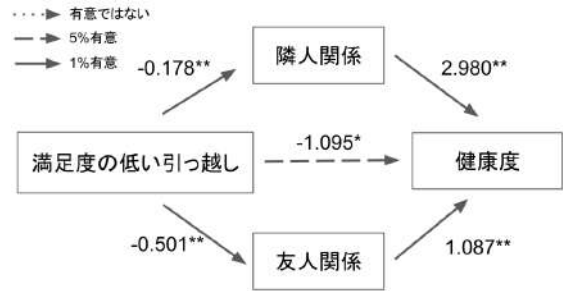


図-6

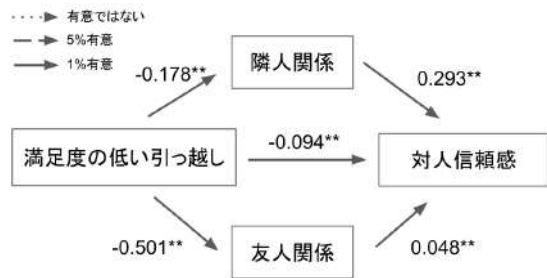


図-7

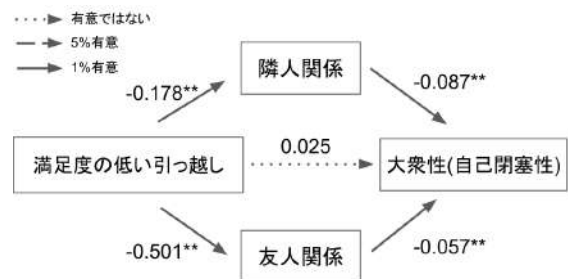


図-8

(5) 総合考察

以上の分析を踏まえ、各種引越しと各種心理尺度との関係について考察する。

まず仮説 1 については、5 歳以上 12 歳以下の引っ越しについては既往研究⁹⁾と同様に仮説を支持する結果が得られ、また背景的な構造として 5 歳以上 12 歳以下の引っ越しが隣人関係の質を媒介として幸福感を低下させている可能性の存在が示唆された。また、満足度の低い引っ越しについて仮説 1 を支持する結果が得られ、背景構造として直接的に引っ越しが幸福感を低下させることに加え、隣人関係、友人関係の悪化を媒介として幸福感を低下させている可能性が示唆された。また、単なる引っ越し、強制された引っ越しについては仮説を支持する傾向は見られなかった。

仮説 2 については、既往研究とは異なる結果として 5 歳以上 12 歳以下引っ越しによって健康度が下がるという仮説は支持されなかった。これについて、日本は海外よりも相対的に治安が良いため、既往研究⁹⁾で示されているような健康度を損なうような幼少期の健康リスク (ACEs) が発生しづらいことが考えられる。満足度の低い引っ越しにおいては、仮説を支持する結果が得られ、背景構造として、直接的に引っ越しが健康度を低下させることに加え、隣人関係、友人関係の悪化を媒介として健康度を低下させている可能性が示唆された。また、単なる引っ越し、強制された引っ越しについては仮説を支持する傾向は見られなかった。

仮説 3 については、単なる引っ越し、5 歳以上 12 歳以下の引っ越し、強制された引っ越しについては仮説を支持する結果は得られず、満足度の低い引っ越しについても大衆性尺度における自己閉塞性との有意な正の相関や隣人関係、友人関係を媒介として有意に上昇する様子は見られたものの、Dark Triad や大衆性尺度における傲慢性を上昇させる傾向は見られず、仮説を部分的に支持するにとどまった。これについては日本人が世間を気にする他者志向性を特徴としており、そのような世間との関わりの中で自己を形成しているという文化的特徴¹⁰⁾と、引っ越しをするほど反社会性を上昇させる傾向が社会による相互監視の効果によって抑制される¹¹⁾といった可能性があることから、日本において引っ越しは道徳性を低下させる傾向が抑制されているという可能性が考えられる。

仮説 4 については、満足度の低い引っ越しのみ仮説を支持する結果が得られ、これについても背景構造として直接的に引っ越しが人への信頼感を低下させることに加え、隣人関係、友人関係の悪化を媒介として人への信頼感を低下させている可能性が示唆された。また、単なる引っ越し、5 歳以上 12 歳以下の引っ越し、強制された引っ越しについて、仮説 4 は支持されなかった。

意に反した引っ越しについては本研究において設定した「強制された引っ越し」においては仮説を支持する傾向は得られなかったが、「5 歳以上 12 歳以下の引

っ越し」は本人が引っ越しを決定する能力はなくこれについても部分的に意に反した引っ越しの一つと考えられ、これについては仮説 1 が支持される傾向が見られた。よって、本研究において、「強制された引っ越し」については他人を理由とした引っ越しとしたが、上記の「5 歳以上 12 歳以下の引っ越し」や、例えば自分に相応の学校や就職先が居住地域周辺に存在せず意に反して転居せざるを得ないと言った状況も考える事ができ、今回提示した理由のみでは意に反した引っ越しを考慮しきれていない可能性も存在し、今後の研究でより詳細な調査と分析が望まれる。

5. 結論

(1) 本研究のまとめと政策的示唆

本研究では、転居がもたらす心理的・身体的被害について調査するため、4 つの観点から分類された引っ越しと幸福感、健康度、道徳性、人への信頼感との関係等の分析を行った。

海外と同様に日本においても、幼少期における引っ越しが「幸福感」を低下させていることが示唆され、日本という文化的・地域的背景の中でこのような結果が得られたことは重要であると考えられる。また、次節で説明するように、この結果の解釈については十分留意が必要であるが、満足度の低い引っ越しを繰り返すほど、「幸福感」や健康度、道徳性、対人信頼感が低下する傾向が示唆された。よって、地方定住意識が少なくとも若年層において拡大している今、東京一極集中を是正する政策の一つとして、地域定住社会を推進することが合理的な政策方針である可能性が高まったと言えるであろう。特に、子供を持つ世帯が安心して地域定住ができるような社会を形成することが人々の幸福感を向上させる上で重要であることが示唆された。加えて、日本においても引っ越しをする人ほど心理的・身体的な弊害が存在する可能性が示唆されたため、社会的流動性の高まりについて、安易に受け入れることや、肯定することは危険であるということも示唆されたと言える。

(2) 今後の課題

本研究における課題を最後に述べる。

まず、本研究において引っ越しを原因とし、様々な心理的・身体的被害を仮定しており、これらの因果が日本においても存在する可能性が示唆されたが、因果の方向性について決定的な示唆を得るまでには至っていない。これを検証するには、海外に見られる既往研究⁹⁾のように長期間にわたるパネル調査等を行い、心理

的・身体的な状態の時系列的な変化や引っ越しについて観測し、分析する必要がある。

また、本研究において引っ越し回数のみを変数として用いたが、引っ越しに対する考え方や、現在の土地に何年定住しているか等の個人の居住地流動性について詳しく検討し、説明変数として用いることで個人の居住地流動性が高まることでどのような影響があるのか、より詳細な分析を行うことが可能であると考えられる。

最後に、本研究において満足度が低い引っ越しについて仮説を支持する結果が得られたが、今後の研究においては満足度の低い引っ越しがどのように起こりうるのかを検討する必要があると考えられる。例えば、引っ越した先での交通が不便であることや、引っ越し先のインフラが整っていないこと、引っ越し先の職場環境が悪い等様々な理由を考えることができこれらについて考慮し分析することは肝要であると考えられる。

付録

従属変数：対人信頼感 (N=1400) R²=0.14, 調整済R²=0.13

	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
引っ越し回数	-0.02	0.03	-0.64	0.52
性別	0.07	0.03	2.93	0.00 **
年齢	0.00	0.03	0.00	1.00
家族関係	0.13	0.03	4.63	0.00 **
外向性	0.18	0.03	6.30	0.00 **
誠実性	0.09	0.03	2.74	0.01 **
開放性	-0.06	0.03	-2.01	0.04 *
協調性	0.05	0.03	1.69	0.09 †
神経症傾向	-0.15	0.03	-4.70	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

従属変数：傲慢性 (N=1400) R²=0.06, 調整済R²=0.06

	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.03	0.00	1.00
引っ越し回数	-0.02	0.03	-0.66	0.51
性別	-0.04	0.03	-1.64	0.10
年齢	-0.02	0.03	-0.65	0.51
家族関係	-0.06	0.03	-2.26	0.02 **
外向性	-0.04	0.03	-1.20	0.23
誠実性	0.05	0.03	1.55	0.12
開放性	0.11	0.03	3.52	0.00 **
協調性	-0.21	0.03	-6.70	0.00 **
神経症傾向	-0.09	0.03	-2.59	0.01 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

従属変数：DTDD-J (N=1400) R²=0.16, 調整済R²=0.16

	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
引っ越し回数	0.02	0.03	0.67	0.50
性別	-0.07	0.03	-2.90	0.00 **
年齢	-0.13	0.03	-4.78	0.00 **
家族関係	-0.08	0.03	-3.20	0.00 **
外向性	0.01	0.03	0.33	0.74
誠実性	-0.02	0.03	-0.66	0.51
開放性	0.22	0.03	7.34	0.00 **
協調性	-0.28	0.03	-9.52	0.00 **
神経症傾向	0.06	0.03	1.87	0.06

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

従属変数：健康度 (N=1400) R²=0.50, 調整済R²=0.50

	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
5歳以上12歳以下引っ越し	-0.01	0.02	-0.76	0.45
性別	0.04	0.02	2.21	0.03 *
年齢	0.04	0.02	1.90	0.06 †
家族関係	0.30	0.02	14.51	0.00 **
外向性	0.14	0.02	6.74	0.00 **
誠実性	0.07	0.02	2.98	0.00 **
開放性	0.06	0.02	2.48	0.01 *
協調性	0.26	0.02	11.50	0.00 **
神経症傾向	-0.25	0.02	-10.32	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

従属変数：対人信頼感 (N=1400) R²=0.14, 調整済R²=0.13

	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
5歳以上12歳以下引っ越し	0.00	0.02	-0.04	0.97
性別	0.07	0.03	2.94	0.00 **
年齢	0.00	0.03	-0.18	0.86
家族関係	0.13	0.03	4.63	0.00 **
外向性	0.18	0.03	6.28	0.00 **
誠実性	0.09	0.03	2.75	0.01 *
開放性	-0.06	0.03	-2.02	0.04 *
協調性	0.05	0.03	1.68	0.09 †
神経症傾向	-0.15	0.03	-4.71	0.00 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

従属変数：傲慢性 (N=1400) R²=0.06, 調整済R²=0.06

	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.03	0.00	1.00
5歳以上12歳以下引っ越し	-0.04	0.03	-1.55	0.12
性別	-0.04	0.03	-1.61	0.11
年齢	-0.02	0.03	-0.89	0.37
家族関係	-0.06	0.03	-2.28	0.02 **
外向性	-0.04	0.03	-1.24	0.21
誠実性	0.05	0.03	1.49	0.14
開放性	0.11	0.03	3.51	0.00 **
協調性	-0.21	0.03	-6.70	0.00 **
神経症傾向	-0.09	0.03	-2.63	0.01 **

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

従属変数：自己閉塞性 (N=1400) R²=0.20, 調整済R²=0.20

	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
5歳以上12歳以下引っ越し	0.02	0.02	0.69	0.49
性別	-0.09	0.02	-3.72	0.00 **
年齢	-0.05	0.03	-1.97	0.05 *
家族関係	-0.18	0.03	-7.10	0.00 **
外向性	-0.03	0.03	-0.97	0.33
誠実性	-0.08	0.03	-2.50	0.01 *
開放性	-0.18	0.03	-6.22	0.00 **
協調性	-0.23	0.03	-7.86	0.00 **
神経症傾向	-0.04	0.03	-1.34	0.18

†:p<0.1, *:p<0.05, **:p<0.01

従属変数：傲慢性 (N=1400) R²=0.06, 調整済R²=0.06

	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.03	0.00	1.00
満足度の低い引っ越し	0.00	0.03	-0.11	0.91
性別	-0.04	0.03	-1.63	0.10
年齢	-0.02	0.03	-0.86	0.39
家族関係	-0.06	0.03	-2.26	0.02 **
外向性	-0.04	0.03	-1.22	0.22
誠実性	0.05	0.03	1.56	0.12
開放性	0.11	0.03	3.50	0.00 **
協調性	-0.21	0.03	-6.72	0.00 **
神経症傾向	-0.09	0.03	-2.59	0.01 **

*:p<0.05, **:p<0.01

従属変数：DTDD-J (N=1400)		R ² =0.16, 調整済R ² =0.16		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
満足度の低い引越し	0.00	0.02	-0.05	0.96
性別	-0.07	0.03	-2.91	0.00 **
年齢	-0.12	0.03	-4.77	0.00 **
家族関係	-0.09	0.03	-3.19	0.00 **
外向性	0.01	0.03	0.36	0.72
誠実性	-0.02	0.03	-0.68	0.50
開放性	0.22	0.03	7.35	0.00 **
協調性	-0.28	0.03	-9.50	0.00 **
神経症傾向	0.06	0.03	1.89	0.06 †

*p<0.05, **p<0.01

従属変数：認知的幸福感(N=1400)		R ² =0.28, 調整済R ² =0.28		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
強制的な引越し	0.00	0.02	-0.07	0.94
性別	0.06	0.02	2.70	0.01
年齢	0.04	0.02	1.65	0.10 †
家族関係	0.31	0.02	12.39	0.00 **
外向性	0.17	0.03	6.65	0.00 **
誠実性	0.07	0.03	2.62	0.01 **
開放性	0.06	0.03	2.21	0.03 *
協調性	0.05	0.03	1.76	0.08 †
神経症傾向	-0.15	0.03	-5.24	0.00 **

†p<0.1, *p<0.05, **p<0.01

従属変数：対人信頼感(N=1400)		R ² =0.14, 調整済R ² =0.13		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
強制的な引越し	-0.01	0.03	-0.37	0.71
性別	0.08	0.03	2.96	0.00 **
年齢	0.00	0.03	-0.11	0.91
家族関係	0.13	0.03	4.63	0.00 **
外向性	0.18	0.03	6.29	0.00 **
誠実性	0.09	0.03	2.74	0.01 **
開放性	-0.06	0.03	-2.02	0.04 *
協調性	0.05	0.03	1.68	0.09 †
神経症傾向	-0.15	0.03	-4.71	0.00 **

†p<0.1, *p<0.05, **p<0.01

従属変数：傲慢性(N=1400)		R ² =0.06, 調整済R ² =0.05		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.03	0.00	1.00
強制的な引越し	-0.01	0.03	-0.45	0.65
性別	-0.04	0.03	-1.55	0.12
年齢	-0.02	0.03	-0.78	0.44
家族関係	-0.06	0.03	-2.26	0.02 **
外向性	-0.04	0.03	-1.22	0.22
誠実性	0.05	0.03	1.54	0.12
開放性	0.11	0.03	3.50	0.00 **
協調性	-0.21	0.03	-6.71	0.00 **
神経症傾向	-0.09	0.03	-2.61	0.01 **

*p<0.05, **p<0.01

従属変数：自己閉塞性(N=1400)		R ² =0.20, 調整済R ² =0.19		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
強制的な引越し	0.01	0.02	0.24	0.81
性別	-0.09	0.02	-3.71	0.00 **
年齢	-0.05	0.03	-1.99	0.05 *
家族関係	-0.18	0.03	-7.11	0.00 **
外向性	-0.03	0.03	-0.99	0.32
誠実性	-0.08	0.03	-2.52	0.01 *
開放性	-0.18	0.03	-6.22	0.00 **
協調性	-0.22	0.03	-7.85	0.00 **
神経症傾向	-0.04	0.03	-1.35	0.18

†p<0.1, *p<0.05, **p<0.01

従属変数：DTDD-J (N=1400)		R ² =0.16, 調整済R ² =0.16		
	標準化係数	標準誤差	t値	p値
定数	0.00	0.02	0.00	1.00
強制的な引越し	0.02	0.03	0.62	0.53
性別	-0.08	0.03	-2.97	0.00 **
年齢	-0.13	0.03	-4.81	0.00 **
家族関係	-0.08	0.03	-3.20	0.00 **
外向性	0.01	0.03	0.34	0.73
誠実性	-0.02	0.03	-0.64	0.52
開放性	0.22	0.03	7.35	0.00 **
協調性	-0.28	0.03	-9.52	0.00 **
神経症傾向	0.06	0.03	1.89	0.06 †

*p<0.05, **p<0.01

NOTES

- 注1) 総務省統計局:住民基本台帳人口移動報告 2021 年結果.
- 注2) World Bank Data: Population in largest city, <https://data-bank.worldbank.org/reports.aspx?source=2&series=EN.URB.LCTY.UR.ZS&country=#> (2022 年 12 月 18 日閲覧)
- 注3) 内閣府 防災情報, https://www.bousai.go.jp/kohou/kouhoubousai/h25/74/special_01.html(2022 年 12 月 18 日閲覧) 田村剛『現代都市の公園計画』内務省衛生局, 1921.4.
- 注4) 労働政策研究・研修機構:若者の地域移動 -長期的動向とマッチングの変化 -,2015.
- 注5) 株式会社 NTT データ経営研究所:地方移住とワーケーションに関する意識調査, 2021.
- 注6) 「トラストバンク、東京在住者の「地方移住に関する意識調査」結果を発表」トラストバンク, 2017 年 8 月 9 日
- 注7) 「地方移住に関する調査結果公開」認定NPO法人 ふるさと回帰支援センター, 2021 年 10 月 7 日 (https://www.furusatokaiki.net/top-ics/press_release/p46850/), 2023 年 1 月 14 日閲覧

REFERENCES

- 市川宏雄：東京一極集中が日本を救う，ディスカヴァー・トゥエンティワン，2015. [Ichikawa, H.: *Tokyo's Unipolar Concentration Will Save Japan*, Discover-Twentyone, 2015.]
- 戸所 隆：東京の一極集中問題と首都機能の分散，地学雑誌，123 巻 4 p.528-541, 2014. [Todokoro, T.: Decentralizing Tokyo's capital functions. *Journal of Geography(Chigaku Zasshi)*, 123, 528-541, 2014.]
- 戸所隆：開発哲学と国土構造の再構築による大震災リスクへの対応，世界経済評論，Vol.55, No.5, pp. 25-29, 2011. [Todokoro, T.: Responding to the Risk of Major Earthquakes through Development Philosophy and Reconstruction of National Land Structure, *World Economic review*, Vol.55, No.5, pp. 25-29, 2011.]
- Shigehiro Oishi : Residential Mobility, Well-Being, and Mortality, *Journal of Personality and Social Psychology*, 2010, Vol. 98, No. 6, 980-994, 2010.
- Dong, M. et al. : Childhood residential mobility and multiple health risks during adolescence and adulthood, *Arch Pediatr Adolesc Med*. 2005;159(12):1104-1110., 2005.
- Li et al. : Sensitive periods of moving on mental health and academic performance among university students,

- ORIGINAL RESEARCH article, 2019.
- 7) Shigehiro Oishi : The psychology of residential mobility: Implications for the self, social relationships, and well-being. *Perspectives on Psychological Science*, 5, 5-21. 2010.
 - 8) 吉野伸哉 : 日本における転居願望と Big Five パーソナリティの関連, 早稲田大学大学院文学研究科紀要 66, 105-114, 2021. [Yoshino, S.: The Relationship between Hope to Move and Big Five Personality Traits in Japan, *Waseda University Graduate School of Letters, Arts and Sciences Bulletin*, 66, 105-114, 2021.]
 - 9) Shigehiro Oishi, Shelly Tsang : The socio-ecological psychology of residential mobility, *Journal of Consumer Psychology*, Vol.32, 3, pp. 519-536. 2022.
 - 10) Diener,E., Lucas,R., Schimmack,U. and Helliwell,J.:Well-Being for Public Policy, Oxford University Press, 2009.
 - 11) 小塩真司, 阿部晋吾, Pino Cutrone : 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み, パーソナリティ研究, 第 21 巻, 第 1 号, pp.40-52, 2012. [Oshio, S., Abe, S. and Custrone, P.:Development, Reliability, and Validity of the Japanese Version of Ten Item Personality Inventory (TIPI-J), *Japan Society of Personality Psychology*, 21, 40-52, 2012.]
 - 12) Tunstall H, Mitchell R, Pearce J, Shortt N. : The general and mental health of movers to more- and less-disadvantaged socio-economic and physical environments within the UK. *Soc Sci Med*. 118, pp.97-107, 2014.
 - 13) Jelleyman T, Spencer N. : Residential mobility in childhood and health outcomes: a systematic review. *J Epidemiol Community Health*, Vol62, 7, pp.584-92, 2008.
 - 14) Shigehiro Oishi, Alexander J Rothman : The Socioecological Model of Procommunity Action: The Benefits of Residential Stability, *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.93, 5, pp.831-44, 2007.
 - 15) Shijiang Zuo et al. : The lure of antagonistic social strategy in unstable socioecological environment: Residential mobility facilitates individuals' antisocial behavior, *Evolution and Human Behavior* Vol.39 pp.364-371, 2018.
 - 16) Siyang Luo, Qianting Kong, Zijun Ke, Liqin Huang, Meihua Yu, Yiyi Zhu & Ying Xu : Residential Mobility Decreases the Perception of Social Norm Violations, *Social Indicators Research*, vol.148, pp.961-986, 2020.
 - 17) Shigehiro Oishi,Janetta Lun,Gary D Sherman : Residential Mobility, Self-Concept, and Positive Affect in Social Interactions, *Journal of Personality and Social Psychology* Vol.93, 1, pp.131-41, 2007.
 - 18) Shinya Yoshino, Atsushi Oshio : Personality and migration in Japan: Examining the tendency of extroverted and open people to migrate to Tokyo, *Journal of Research in Personality*, Vol.96, 2022.
 - 19) Camperio Ciani, A.S., Capiluppi, C., Veronese A., & Sartori, G. : The adaptive value of personality differences revealed by small island population dynamics, *European Journal of Personality*, Vol.21, 1, pp.3-22, 2007.
 - 20) Markus Jokela : Personality predicts migration within and between U.S. states, *Journal of Research in Personality*, Vol. 43, 1, pp.79-83, 2009
 - 21) 三宅元子 : 中学・高校・大学生の情報倫理意識と道徳的規範意識の関係, 30 巻, 1 号, pp.51-58, 2006. [Miyake, M.: Relation between the information ethics consciousness and ethical code consciousness of junior high school students, high school students, and college students, *Japan Journal of Educational Technology*, 30, 51-58, 2006]
 - 22) Diener,E.: Subjective well-being, *Psychological Bulletin*, Vol.9 5, No.3, pp.542-572, 1984.
 - 23) Andrews, F.M., Withey, S.B. : Social indicators of well-being: America's perception of life quality. New York: Plenum Press., 1976.
 - 24) Västfjäll,D., Friman,M., Gärling,T. and Kleiner,M.: The measurement of core affect: A Swedish self-report measure, *Scandinavian Journal of Psychology*, Vol.43, No.1, pp.19-31, 2002.
 - 25) 北川夏樹, 鈴木春菜, 中井周作, 藤井聡: 日常的な移動が主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究・論文集, Vol.67, No.5, pp.697-703, 2011. [Kiatgawa, N., Suzuki, H., Nakai, S., Fujii, S.: The Impact of daily travel on subjective well-being, *Infrastructure planning review*, Vol.67, No.5, pp.697-703, 2011.]
 - 26) Diener, E et al. : The Satisfaction With Life Scale, *Journal of personality assessment* vol.49,1, 71-5, 1985.
 - 27) 大石繁宏 : 幸せを科学する-心理学からわかったこと, 新曜社, 2009. [Oishi, S. : *The Science of Happiness: Insights from Psychology*, Shinyo-sha, 2009.]
 - 28) 徳永幹雄 : 「健康度・生活習慣診断検査(DIHAL.2)」の開発, *健康科学*, Vol.27 57-70, 2005. [Tokunaga, M.: Development of Health and Life Habit Inventory (DIHAL.2), *Health Science*, Vol.27 57-70, 2005.]
 - 29) 松本壽吉編 : 健康度診断指標の設定に関する研究, 昭和 57 年度科学研究費補助金, 一般研究 (B) 研究成果報告書, 1983. [Matsumoto, J.: A Study on the Establishment of Health Diagnosis Indicators, *1982 Fiscal Year Scientific Research Grant, General Study (B) Research Results Report*, 1983.]
 - 30) 松本壽吉 : 健康度診断検査についての研究, *健康科学*, 9, 159-180, 1987. [Matsumoto, J.: A Study on Diagnostic Test of the Degree of Health, *Health Science*, 9:159-180, 1987.]
 - 31) 松本壽吉 (代表) : 健康度診断検査用紙, トーヨーフィジカル発行. [Matsumoto, J.: Health Assessment Examination Sheet, Issued by Toyo-Physical Corporation]
 - 32) 羽鳥剛史, 小松佳弘, 藤井聡 : 大衆性尺度の構成——“大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析——, *心理学研究*, 79 巻, 5 号, pp.423-431, 2008. [Hatori, T. Komatsu, Y., Fujii, S.: Development of a vulgarity scale based on Ortega's "The revolt of the masses", 79, 5, pp.423-431, 2008.]
 - 33) 田村紋女, 小塩真司, 田中圭介, 増井啓太, ジョナソンピーターカール : 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J) 作成の試み, パーソナリティ研究, 24 巻, 1 号, pp.26-37, 2015. [Tamura, A., Oshio, A., Tanaka, K., Masui, K., Jonasan, P.K.: Development, Reliability, and Validity of the Japanese Version of the Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J), 24, 1, pp.26-37, 2015.]
 - 34) Ortega, J. (訳 : 神吉敬三) : 大衆の反逆, ちくま学芸文庫, 1995. [Ortega, J. (translated by Kanki, K.): *The Revolt of the Masses*, Chikuma Gakugei Bunko, 1995.]

- 35) 小松佳弘, 羽鳥剛史, 藤井聡 : 個人の大衆性と弁証法的議論の失敗に関する実証的研究. 東京工業大学土木工学専攻平成 20 年度修士論文, 2009. [Komatsu, Y., Harori, T., Fujii, S.: An Empirical Study on Spiritual Vulgarly of the Masses and Failure of Dialectic Discussion, *Master's Thesis for the 2008 Academic Year, Department of Civil Engineering, Tokyo Institute of Technology*, 2009.]
- 36) Peter K. Jonason, Victor X. Luevano, Heather M. Adams : How the Dark Triad traits predict relationship choices, *Personality and Individual Differences*, Vol.53, 3, 2012.
- 37) Jones, D. N., & Paulhus, D. L. : Duplicity among the dark triad: Three faces of deceit, *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.113, 2, pp.329-342, 2017.
- 38) Jonason, P.K. & Webster, G.D. : The Dirty Dozen: A concise measure of the Dark Triad. *Psychological Assessment*, Vol.22, 420-432. 2010.
- 39) 堀井俊章 : 対人信頼感尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究, 日本性格心理学会発表論文集, 2 巻, pp.34, 1993. [Horii, T.: A Study on the Development of a Scale for Interpersonal Trust and Its Reliability and Validity, *Proceedings of the Japanese Society of Personality Psychology*, 2, pp.34, 1993.]
- 40) 堀井俊章, 槌谷笑子 : 最早期記憶と対人信頼感との関係について, 性格心理学研究, Vol.3, pp.27-36, 1995. [Horii, T., Tsuchiya, E.: A study of the relationship between the earliest recollection and interpersonal trust, *The Japanese Journal of Personality*, Vol.3, pp.27-36, 1995.]
- 41) Rotter, J. B. : A new scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, Vol.35, 4, 651-665, 1967.
- 42) Mac Donald, A P Jr et al. : Self-disclosure and two kinds of trust, *Psychological reports*, vol.30, 1, 143-148, 1972.
- 43) Schuster, T L et al. : Supportive interactions, negative interactions, and depressed mood, *American journal of community psychology*, vol.18,3, pp.423-38, 1990.
- 44) Walen, H. R., & Lachman, M. E. : Social Support and Strain from Partner, Family, and Friends: Costs and Benefits for Men and Women in Adulthood. *Journal of Social and Personal Relationships*, Vol.17, 1, pp.5-30, 2000.
- 45) Keyes, C. L. M. : Social well-being. *Social Psychology Quarterly*, 61, 2, 121-140, 1998.
- 46) Gosling, S.D., Rentfrow, P.J., & Swann, W.B., Jr. : A Very Brief Measure of the Big-Five Personality Domains, *Journal of Research in Personality*, Vol.37, pp.504-528, 2003.
- 47) Costa, P.T., Jr., & McCrae, R.R. : Revised NEO Personality Inventory (NEO PI-R) and NEO Five-Factor Inventory (NEO-FFI): Psychological Assessment Resources, 1992.
- 48) 内田照久 : 音声の発話速度が話者の性格印象に与える影響, 心理学研究, 73 巻, 2 号, pp.131-139, 2002. [Uchida, T.: Effects of the speech rate on speakers' personality-trait impressions, *The Japanese Journal of Psychology*, Vol.73, 2, pp.131-139, 2002.]
- 49) 上田恵津子 : 日本人の自己形成と世間, 大阪大学教育学年報, 1, pp39-48, 1996. [Ueda, E.: *Seken and Development of Self in Japanese Culture*, *Annals of Educational Studies*, Vol.1, pp39-48, 1996.]
- ??????

A STUDY OF PSYCHOLOGICAL AND PHYSIOLOGICAL ADVERSE EFFECTS OF RESIDENTIAL MOBILITY

Sota NAKATANI, Yuichiro KAWABATA and Satoshi FUJII

In our country, the concentration of population in Tokyo continues to persist, while on the other hand, there is an increasing awareness of the importance of settling in local areas, leading to a fear of an increase in unwanted moving. Additionally, numerous studies have shown various negative effects of frequent relocation in overseas settings, but there has been no quantitative analysis of the negative effects of relocation in Japan. Therefore, this study analyzed the relationship between residential mobility and various psychological and physical problems through a survey. The results of the analysis showed a tendency for relocation during childhood to lower subsequent well-being levels, and statistically observed psychological and physical negative effects of frequent relocation, suggesting that promoting a local community settlement society is a rational policy direction.